

論文内容の要旨

我が国では、従前から「志を持つ」こと、「立志する」ことの重要性が指摘され、そのこと自体は、広く受け入れられている。具体的に、古くは、論語、陽明学などの古典に始まり、吉田松陰、坂本龍馬などの歴史的人物、そして、松下幸之助、稲森和夫、孫正義、スティーブ・ジョブズ等、多くの経営者が、その意味を説いている。しかし、志に関する議論を精査してみると、どのようにして志を見つけ、その実現のために一步を踏み出し、更にはそれを糧に生きていくことができるのかといった、個人の人生の意味を深めるのに役立つような実践的な考察は見受けられず、単なる、「べき論」や「精神論」になっていることが多い。

なぜなら、多くの場合、志について言及する人は、自身の志が明確になってしばらくしてから、もしくは、ある一定の年齢になってからその重要性について「のみ」語るため、その醸成方法や醸成されてきたプロセスなどについて触れられることは滅多になく、かえって、その重要性を訴求するインパクトの強いメッセージを受け取った人が、「自分には志がない」、「一生をかけて取り組むべきテーマが見つからない」、「自分の持っている思いはとても志と呼べるようなものではない」などと、悩むことになる場合が多いのである。

それ故、「志」はどのように生まれ、実現され、終焉し、次の「志」が生まれていくのかといった志醸成のプロセスや、背後に存在するメカニズムを明らかにすることができれば、具体的に、どのようにすれば、志をもって生きていくことができるのかという、多くの人に有意義なメッセージを送ることが可能となると考え、本研究を実施した。

研究の第一段階として、学術的な定義が存在しない「志」という言葉を、「一定の期間、人生をかけてコミットできるようなこと」と定義した上で、30名を超える多様な日本人の社会人（ビジネスパーソン、経営者、スポーツ選手、NPO関係者等）に1回2時間程度、一人2回程度のインタビュー調査を実施した。

一般的な志の議論においては、多くの人が、「まだ、見つからない」、「まだ、わからない」といった言葉で語るが、一連の研究から明らかになったことは、多くの場合、志は何もないところから、ある日突然「発見」される、または、天から降ってくるようなものではなく、一定のサイクルを経て、創られていくということである。具体的には、ある志は、「達成への取り組み－取り組みの終焉－客観視－自問自答－新しい目標の設定」というプロセスをたどることが多いことがわかった。また、一般に、志というと、「一生をかけて取り組むもの」といった長期のイメージが想起されることが多いが、実際には既述のようなプロセスをたどることが多く、ある志は終わり、次の志が、スパイラル状に成長していく、または積み重なるように成長していくこと、その成長の方向性には一定の法則があることを明らかにした（「志を育てる、東洋経済新報社、2011」）。

その上で、第二段階として、その研究をベースに、次のことを明らかにした。

- 「志の醸成サイクル」はどのような論理構造（メカニズム）になっているのか
- 経営大学院（ビジネス・スクール）の教育は、志醸成にどのような影響を与えているのか

「志の醸成サイクル」はどのような論理構造（メカニズム）になっているのか

先に述べたように、第一段階の研究では、インタビューやワークショップなどから帰納的に抽出した概念（フレームワーク）を提示したに留まっていたが、研究の第二段階においては、キャリア理論（SCCT理論、トランジション理論、キャリア・チェンジ理論等）、モチベーション理論、心理学等の様々な領域の知見を活用することにより、スパイラルの各要素その論理構造（メカニズム）を明らかにした。

例えば、志の終焉は、ウィリアム・ブリッジズのトランジション理論（新しいことを始めるためには、まずは既存の取り組みをしっかりと終焉させる必要がある。しかし、終焉させることは簡単なことではなく、しばらく中立圏と呼ばれる、心が揺れ動く期間が存在する場合が多い）により、そのメカニズムや、インタビューで取得したコメントの背景を説明できることがわかった。また、客観視、自問自答に関しては、ハーミニア・イパーラが議論した、キャリア上の成功は階段を上るような直線的なものではなく、自分に合うものを何度も模索する必要があり、そのために、様々なこと

へのチャレンジ、人的なネットワーク構築、そして自分史を見直すなどのことが必要であるといった理論で説明できることがわかった。

次に、志醸成サイクルの5つの個々のフェーズのメカニズムに加え、「志」のサイクルが前に進む時（たとえば、自問自答から新しい目標の設定へ）には、その人の中で、クリス・アージリスがいうダブル・ループ学習（外部から新しい知識や情報を取り入れ、或いは、現在の前提に対して、「それは本当か」、「そもそも」と問いかけ、新たな前提や価値観を獲得していき、それに従って行動していくプロセス）が回っていることを、多数のインタビュー調査の結果より明らかにした。

また、この議論の延長線上で、新しい志に向かって一步を踏み出すか否かについては、自分がなし得たいと思うこと（対象）と判断軸のマトリックスで、整理出来ることを明らかにした。新しい対象に関する情報を得ただけでは、ダブル・ループ学習に入ることはなく、既存の評価軸より重要だと認識できる新しい軸を持ちえた人達だけが、ダブル・ループ学習を回し、これまでとは異なるステージに入っているのである。

ダブル・ループ学習に加え、本研究では、志醸成サイクルを回すことができる人の思考のプロセスは、次に取りうるオプションなどを詳細に、分析的に検討し、具体化して、考えているのではないかという仮説を立てた。換言すれば、論理的な、意思決定のプロセスをしっかりと踏むことができると、次へ向かったアクション可能な結論を導くことができるのではないかということである。20名以上へのインタビューと、130名以上の自由既述のアンケートによる検証の結果、思考の細分化、具体化については高い確率で志醸成サイクルを回すことに役立っていることが検証できた。

経営大学院（ビジネス・スクール）の教育は、志醸成にどのような影響を与えているのか

ある社会人向け経営大学院を例に、日々実施されている様々な教育的施策が、志醸成をどのように後押しするか、影響するかについて、既に明らかにした「ダブル・ループ学習の加速」、「思考の具体化、詳細化」などを中心に、インタビューや全問自由記述のアンケートを実施、分析した。その結果、高い確率で、その効果が認められ、経営大学院の教育効果の存在を検証することができた。

具体的に、ダブル・ループ学習を加速するという意味では、学習スタイル、仲間との議論、講師との議論、仲間の成功を見ること、直接的に志を問われることなど、様々な影響因子が影響していることが検証された。

思考の具体化・詳細については、特に、特に何度も自らの志やキャリアについて文字化することにより、自分の考えなどに対する認識を深め、その結果、志の醸成サイクルと一步踏み出せるようになる効果が認められた。

また、上記の2つの点以外については、経営大学院で実施されている様々な施策について関連する、自己の確立に関連の深い心理学の研究成果などをベースに、志醸成のサイクルとの関係を解明しつつ、効果をアンケート結果などで検証した。その結果、経営大学院が以下のようなことに影響を与えていることが明らかになった。

- （人生をポジティブに考える効果）自らの半生を言葉、文字にし、語り、他人に聞いてもらうことにより、人生を肯定的にとらえることができ、志の醸成サイクルと一步踏み出せるようになる可能性が高まるが、経営大学院の必修科目の中で実施しているライフ・ライン・チャート作成と、それに関する小グループでの対話は一定の効果を上げていることが検証された。
- （志の成就を後押しする効果）「自らの志を文字にし、語り、他人に聞いてもらうことが、一貫性を保ちたくなる心理作用を呼び起こし、志を実現する後押しになるが、経営大学院の施策は、それを促進する効果があることが検証された。
- （自己効力感を向上させる効果）自己効力感が高まり、自己評価が肯定的になると、志の醸成サイクルを一步踏み出せるようになる可能性が高まるが、これについて、大学院の各種の施策は、小さい成功体験を多数踏ませる、他人がやっている姿を見て、自分もできると思えるようになるなどの効果があり、後押ししていることが検証された。

以上、本研究では、

1. 志醸成サイクルの明確化とそのサイクルが回る論理構造（メカニズム）

2. 志の醸成サイクルが回る際のメカニズム（ダブル・ループ学習と思考の詳細化・具体化）。
- を明らかにした上で、
3. ある経営大学院の事例研究

を行い、その効果を検証した。